

『左伝』における「何」を用いた反語文

著者	杉田 泰史
雑誌名	言語学論叢
号	19
ページ	1-14
発行年	2000-12-25
その他のタイトル	Rhetorical questions with HE in Zuo Zhuan
URL	http://hdl.handle.net/2241/10601

『左伝』における「何」を用いた反語文

杉田泰史

1 はじめに

中国の文法学者何樂士は、何 (1988a) において、『左伝』に現れる機能語 (いわゆる虚詞) 「何」を大きく三つに分けた¹。小文はその三分法に則りつつ、箇々の用例の帰属に些かの疑問を提示し、杉田 (1994, 1998, 2000) に基づく新たな分類の目安を提案するものである。

2 何氏による分類

以下に何 (1988a) による分類と集計のうち関係する箇所を要約する²。『左伝』における「何」は以下の三つに分類される。

何¹: 代名詞“何”(なに) とそれを含む句‘詞組’や文型‘固定格式’

何²: 形容詞“何”(どんな) とそれを含む句や慣用句

何³: 副詞“何”(どうして) とそれを含む句

何¹ (代名詞) の単独用法 (126 例) における指示対象とその内訳は 1) 「事」(94 例) 2) 「物」(11 例) 3) 「場所」(11 例) 4) 「人」(10 例) であ

¹小論は杉田 (2000) において提示された仮説を補足するために、先行文献である何 (1988a) について主に再考するものである。杉田 (2000) の原型となる発表を北京にて行った際、何樂士先生には貴重なコメントをいただいた。ここに深く感謝申し上げる。何氏論文における文法用語は極力日本の言語学用語として一般的なものに置き換え (例: 代詞→代名詞)、筆者が必要と感じた場合のみ「」内に原文の用語を記すことにする (例: 慣用句‘固定格式’)。なお本文及び注における漢字はできるだけ簡略字を含む日本式の字体に統一した。

²小論では「何」が単独で直接に述語に関わる場合を論じ、句や慣用句 (「如何」「何謂」「若 N 何」「何也」など) については基本的には触れない。ただし後述する「何 V_{yu}N」の文型に関してはその一部を問題とする。またテーマの性質上、何¹・何²・何³のうち特に問題とするのは何¹と何³についてであり、何²は問題としない。

る。

何¹の用法は大半 (91 %) の 115 例が反語 ‘反問’ 即ち疑問の形式を用いた否定であり、11 例 (9 %) が ‘詢問’ 即ち疑問を表す。

何¹の単独用法の文中における文法機能は、目的語 (118 例・93 %) がほとんどで、述語 ‘謂語’ (2 例・1.6 %)・主語 (6 例・5.4 %) となる例は少ない。

何² (形容詞) は「何 X」の形で名詞を修飾する (61 例)。多くは反語文に用い (54 例)、疑問文に用いる例は少ない (7 例)。

何³ (副詞) は 56 例のうち 48 例 (86 %) が、助動詞または副詞と結びついて共に述語の前に現れ、連用修飾語 ‘状語’ となる。何³が単独で連用修飾語となるのは 8 例と少ない。

何³の特徴は 3 つある。1. 述語動詞のあとに目的語が現れる (何VO)。2. その前に被動作主 ‘受事’ の主語がある (O何V)。3. その後に形容詞述語が来ることができる (何A)。

3 何氏の分類の問題点

以下に何氏の分類とその挙例を検討する³。

何氏の挙げた何³の特徴 1. 2. 3. の例は以下の通りである。

1. 何³の述語動詞のあとに目的語がある：

(1) 吾過、子姑告我、何疾我也？(襄 22・3・1070) わたしに過失があるなら、どうか何でも話してほしい、どうして自分 (わたし) を毛嫌いなさるか。(中・269)

2. 何³の前に被動作主 ‘受事’ の主語がある：

³以下の用例は原文は何氏に倣い楊 (1981) における箇所 (隠 1 = 隠公元年)・巻数 (3 = 第 3 冊) 及び頁数を記し、日本語訳は小倉 (1988, 1989) を引いて上中下の別と頁数を記す。ただし文法上の説明の便宜から直訳により近い訳や背景の説明となる補足を () 内に付する時がある。逆に原文の用字を尊重した当て字のたぐいは一般的な表記にあらためた (例えば「吾」と書き「わたし」と仮名を振ったものは単に「わたし」とした)。なお [] 内は小倉訳における補足である。基本的にこの訳は読み物として書かれたものであるため、ここでの何氏および筆者の文法上の解釈とは別物の、大意をつかむための参考程度に考えられた。また、どちらの引用においても、文章の流れをつかむのに不要と思われる部分に限り筆者による省略を行い、それを「…」によって示す。

(2) 不能, 如辞。城不知高厚, 小大何知? (定 5・4・1554) できぬとわかっていたら、(築城を) ことわればいいのに。城壁の高さ厚さを知らぬようでは、周囲の大きさなどご存じあるまい (どうしておわかりになろう)。(下・341)

3. その後に形容詞述語が来ることができる:

(3) 諸侯貳, 則晋国壞; 晋国貳, 則子之家壞, 何没没也! (襄 24・3・1089) 諸侯が離叛すれば、晋国 [の盟主] の地位は崩れるし、晋国内部で離叛がおこれば、あなたの家は崩れる。そのことがおわかりになりませんか (どうしてぼんやりしていられましょうか)⁴。(中・286)

これらは「何」という語が何³であるための十分条件であって必要条件ではない。すなわち 1. 2. 3. のいずれかひとつでも満たしていれば何³であるとは言えるが、その全てを満たす必要はなく、いずれも満たさない場合にも何³である可能性はある。

ここで必要とされるのは何¹と何³を区別するための判断の基準である (何²が他の 2 つと紛れることは実際にはまずない)。何¹が他動詞文においてほとんど目的語として出てくると、そしてそれは倒置された形で文頭に出てくるとを考慮に入れるなら、何¹と何³を区別すると言うことは、「何 V X?」(X はここではゼロを含む任意の要素) という文を「何を V するのか (疑問) / 何を V することがあろう、いやしない (反語)」と解釈するか (即ち何¹)、 「どうして V するのか (疑問) / どうして V する事があろう、いやしない (反語)」と解釈するか (即ち何³) の違いを判別するということである。実際に内容を取ろうとすると、疑問と反語の違いを判別することよりも、疑問代名詞の何¹と疑問副詞の何³の違いを判別することの方が (両者とも疑問用法と反語用法とがある) 注意を要する作業である。訓読においても「何をか V する (疑問) / V せん (反語)」(何氏の言う何¹に相当) と「何ぞ V する (疑問) / V せん (反語)」(同じく何³に相当) との二者の間の判別の基準は曖昧であり、解釈はまちまちである。

疑問と反語の違いならば、文脈をみればよい。何氏も言うように、答え

⁴楊注に「没没猶言昧昧, 不明白, 糊塗」とある。わからない有様をあらわす形容詞か。

を要求していて相手がそれに回答しているものは疑問、話し手が自分の意見を述べるときに多くはその最後に結論として出てくる言葉で、誰にも回答を要求せずまた誰も答えていないものは反語である。

4 未然構文としての何 V Yu N

筆者はかつて杉田 (1994,1998,2000) において古典中国語の前置詞「於」「于」「乎」についてこれらを一括して YU と名付け (小論中においては以下 Yu とする)、一部の他動詞構文に SVO とは別に SVYuO の文型を取るものがみられることに着目した。

そこで筆者は、SVYuO の文型を取る他動詞文に、失敗に終わる試み (動能相)、継続的な動作の始まり (始動相)、そして動作の実現に対する話者の否定的な態度 (非現実法) など、共通して動作の実現の不完全性という特徴がみられることを指摘した。

広く世界の諸言語に直接目的語を斜格に格下げすることで、しばしば部分的・不完全・進行などのアスペクトが生じる事をふまえて、筆者は古典中国語においても同様に斜格の Yu の存在によって動詞 (中略) の目的語に対する影響度 (affectedness) が弱められ、他動性は減少し、動作は不完全なものとなったと考え、杉田 (2000) において以上の動能相・始動相・非現実法をまとめて「未然構文」と名付けた (杉田 (1994,1998) においてもここまでの推論は同じで、ただ構文に対する命名と分類の数が少々異なる)。「何」に関する小文の推論も以下その仮説に基づいて行う。以下に挙げる「何」を用いた反語文の例は、すべて未然構文の非現実法に相当すると筆者は考える。

5 何氏の挙例とその問題点

5.1 文型「何 V 焉」

何 (1988a:242) は何¹の「指物」の例として、

(4) 子大叔曰:“宝以保民也, 若有火, 国幾亡。可以救亡, 子何愛焉?” (昭 18・4・1395) 子大叔は言った、「宝器は民を保護するためのもの、もし重ねて火災になったら、国は滅びてしまう。滅亡から救えるものを、あ

なたは物惜しみをしてどうするつもりか」

を挙げ、「“何”代上文的“宝”」と解釈している。反語の「あなたは何を惜しむのか」という解釈である⁵。国の宝玉を寄越しなさい、それで火災を防いで見せましょうと言う巫師に宝を与えない子産を批判する言葉である。

『左伝』における「焉」の大多数が語気詞ではなく小論の言う Yu と代名詞「之」または「是」との合音詞であることは、何氏自身が別の論文何 (1988b) によって明らかにしている。筆者もその立場である。したがって「何 V 焉」の文型における「焉」は基本的には特定の指示対象を持つはずである。ところが何氏はここでそれを明らかにしていない。

筆者はこの「何」は何¹ではなく何³で、(4)の「子何愛焉？」は、「あなたは何を惜しむのか」でなく「あなたはどのようにそれ(=宝物)を惜しむのか」と解釈すべきだと考える。そうしてはじめて「焉」の指示対象が明確になるからである。

同様に、何 (1988a:242) は何¹の「代人」の例として、

(5) “…裹糧坐甲，固敵是求。敵至不擊，將何俟焉？”(文 12・2・591)
「…兵糧を携えよろいを着ているのは、もとより敵を求めてのこと。敵が攻めて来たのに攻撃もせぬ。いったい何を待っているのだ」

を挙げている。これは秦軍を完全に討とうとしても出来ない晋の趙穿が作戦に対して不満を漏らすところである。「何」を「代人」とするなら、「將何俟焉？」は「いったい誰を待っているのか」となるが、ここでも「焉」の指示対象は明確でない。

筆者はこの「何」も何¹ではなく何³で、(5)の「將何俟焉？」は、「いったい誰を待っているのか」でなく「いったいなぜそれ(=敵)を待っているのか」と解釈すべきだと考える。

これらの例だけなら「何 V 焉」における「焉」が語気助詞であるという解釈も成り立ちうる。しかし、同じ動詞について「何 V Yu N」と「何

⁵『左伝』における動詞「愛」は他の用例も「惜しむ」である。『論語』の「爾愛其羊，我愛其礼」と同様である。

V 焉」が同じ反語の文として成立する例も存在する。反語の例として何 (1988a:243) の挙げる、

(6) 晋人将尋盟，齊人不可。晋侯使叔向告劉献公曰：“抑齊人不盟，若之何？”对曰：“盟以底信，君苟有信，諸侯不貳，何患焉？…” (昭 13・4・1355) 晋の人は以前の盟を温め直そうとしたが、齊の人が承知しない。晋侯は叔向を「周の卿士」劉献公のもとに派して、「齊の人が盟に同意しないが、どうしたものでしょう」と報告させると、こう答えた。「盟とは信を示すもの。あなたに信さえあれば諸侯は離叛せぬから、心配は無用です。…」

を見ると、「何患焉？」が反語であることは明らかなが、同じ動詞「患」(心配する)を用いた例、

(7) 齊有彗星，齊侯使禱之。晏子曰：“無益也，祇取誣焉。…君無違德，方國将至，何患於彗？…” (昭 26・4・1479) 齊に彗星が現れた。齊侯（景公）が消災の祓いを〔祝吏に〕命じると、晏子（晏嬰）は言った。「役に立たぬし、欺されるだけのことです。…わがきみが徳に違わなければ、四方の諸国は到来するはず。彗星を気にすることはありません」

における「何患於彗？」もまた反語の例である。先に述べたとおり、何氏自身が『左伝』における「焉」は Yu と「之／是」との合音詞であると主張しており、当然 (6) のような「何 V 焉」と (7) のような「何 V Yu N」はともに何¹ (何を) ではなく何³ (どうして) を用いた反語文であると見なければならぬ。(6) のような「何 V Yu N」の例については、氏自身も何 (1987) において N が動作の受け手「受事」であることを認めているところである。

他にも、「余何獲焉？」(襄 21・3・1063) (筆者訳：私 (= 晋の范宣子) がどうして彼ら (逃げた家臣四人のうち呼び戻してはどうかとの諫言で挙げられた有能な二人) を得たりするものか) のように、「焉」の指示対象が明確でない「何 V 焉」の文が何¹の例として挙げられているが、これも

何³と見るべきであろう。

5.2 文型「何有 Yu N」

『左伝』における「何V焉」および「何V Yu N」を用いた反語文の例は多い。何氏は分析に当たっていずれの例における「何」も何¹(何を)と解釈した上で両者を分離して考え、前者を動詞「有」を用いた「何有 Yu X」およびその「変式」と同様であるとし(1988a:261)、後者の「焉」の指示対象については言及していない。

「何有 Yu X」(筆者の表記法では「何有 Yu N」、XもNも名詞句)の例は以下の2つである。

(8) 公曰:“君子不重傷, 不禽二毛。…”子魚曰:“…雖及胡老⁶, 獲則取之, 何有於二毛?”(僖 22・1・398) (宋の襄)公は言った、「君子は負傷者を重ねて傷つけず、白髪まじりの者を捕虜にせぬものだ。…」子魚は言った。「…たとえ老人でも、捕えれば命を取るだけのこと、白髪などは気にすることはない。…」

(9) 鄭放游楚於吳。將行子南, 子產咎於大叔。大叔曰:“吉不能亢身, 焉能亢宗?…周公殺管叔而蔡蔡, 夫豈不愛?王室故也。吉若獲戾, 子將行之, 何有於諸游?”(昭 1・4・1213) 鄭は游楚(子南)を吳に追放した。子南を立ち去らせるに当り、子産は「游氏の宗主たる」大叔(游吉)に意見を求めると、大叔は言った。「わが身を護れぬわたしに、一族を護ることなどできません。…その昔、周公は「乱を起こした兄の」管叔を殺し「弟の」蔡叔を追放したが、愛憐の情がなかったのではなく、周の王室のためにそうされたのです。もしわたしが罪を犯したら、どうぞ処罰を執行してください。游氏一族のことなど、どうぞ構わずに」

何氏は(8)の「何有於二毛?」を「二毛(老人)に対して惜しむべき何があるか? (対二毛有甚麼可愛惜的?)」と解釈している。(9)の「何有於諸游?」についても同様である。いずれも前後に動詞「愛」(惜しむ)が

⁶「老」の字は原文では別字「コウ」で、「おいなんむり」(「老」の上部)の下に「句」を書く。

あるため、それと呼応するとした上での訳であるが、(9) は先行する箇所
に「夫豈不愛」があるからとするのはまだいいとしても、(8) の場合は引
用箇所よりも後に「愛其二毛，則如服焉」がある。まだ出ていない動詞と
呼応しているというのは辻褄が合わない。(8)(9) ともに「有」に続く名詞
句の指示対象の存在意義そのものに対する話者の主観における否定的態度
と見るべきであろう。

5.3 文型「何有焉」

『左伝』には「何有焉」という文型もあり、何氏はこれを 3 通りに分類
している。その(一)は「表示“何得”，意即不能得到甚麼」として、

(10) 大夫請以入。公曰：“獲晉侯，以厚帑也；既而喪帑，焉用之？大夫
其何有焉？…”（僖 15・1・359）大夫は（捕獲した）晋侯を国都に連れ
込もうと請うたが、（もしそうしたら自殺すると晋の恵公の姉である夫人
に言われた秦の穆）公は言った。「晋侯を捕獲したのは重大な戦利品で
ある。それが〔夫人の自殺で〕喪服の帑国となれば、何の役にも立たぬ。そ
なたとて何の得にもなるまい。…」

を挙げ、杜預注「何有猶何得」を根拠に「大夫其又能從中得到甚麼」（そ
なたもそこから何を得られるのか）と解釈しているが、「焉」の逐語訳と
見られる「從中」は苦し紛れの印象を与える。たしかに「焉」およびそこ
に含まれる「於」には現代語の「從」と同様に動作の出発点を指す用法が
あるが、「*有 A 於 B」が「A を B から得る」と言った意味になる例はな
い。杜預の注は「何 V 焉」についてこれまで述べてきた考察を経たもので
はなく、文の流れに沿った解釈にすぎない。ここでの穆公は大夫の「以入」
すなわち晋の恵公を連れて入城することに反対しているのだから、それが
「焉」の指示対象であり、「有」はそのことの可否をあらわし、ここでは反
語によってその行為の意義を否定していると思われるべきである。大夫の行為
である「請」が往々にして「～しようと申し出る」という意味であることを
考えあわせると、その内容に対する穆公の回答は「そなたがどうして連
行して入城することがあろうか」と解釈するのが妥当であろう。

その(二)は「表示心目中沒有某箇対象」として、

(11) (寺人披) 対曰: “…除君之惡, 唯力是視。蒲人、狄人, 余何有焉? 今君即位, 其無蒲、狄乎!” (僖 24・1・414) (晋文公重耳に過去に自分を殺そうとしたことを咎められた) 寺人披は答えた。「国君のにくむ人を除くために、己が力を尽くすのは当然のこと。蒲にいる人、狄にいる人(重耳)のことなど、[晋の臣たる] わたくしには無関係でした。今、即位なさったわが君も、蒲や狄は眼中にございませんでしょう。…」

を挙げ、楊伯俊(1981)の注「此謂心目中無之也。下文‘其無蒲、狄乎’，即此意之正面説法。‘有’与‘無’正相對照。」をそのまま引いている。ここでも「焉」が指すものの対象は不明である。「何」を何¹ではなく何³と考えたほうが、文意には大差なくとも「焉」が「蒲人、狄人」を指す事が明らかになる。すなわち「私にとって何が存在するといふのか」ではなく「私にとってどうしてそれ(=蒲や狄の人)が存在するといふのか」ととらえるべきである。

分類の(三)は「表示没有甚麼(利害)關係」の例として、

(12) 晋祁勝与[烏邑]⁷臧通室。祁盈将執之，訪於司馬叔游。叔游曰：“…無道立矣，子懼不免。…姑已，若何?” 盈曰：“祁氏私有討，国何有焉?” (昭 28・4・1491) 晋の[祁盈の家臣]祁勝と[烏邑]臧が、たがいに相手の妻と通じ合ったので、祁盈は二人を逮捕しようとして、司馬叔游にたずねた。叔游は、「…無道の人が位にある現在、あなたは禍から免れられまい…しばらく見合わせられてはいかがか」と言ったが、盈は、「祁氏として内々に処分するのだから、国とは関わりがない」と、…

を挙げ、楊注「言討家臣，無与国事」を引き、「祁氏私家的討伐，和国家有甚麼關係?」(祁家内部の私的制裁だ、国と何の關係があるか)と解釈している。これも「焉」の指示対象が不明である。これも「何」を何¹ではなく何³と考え「国がどうしてそれ(=制裁‘討’)と關係あるか」または「国がどうしてそれをする事があろうか」と解釈すべきである。

⁷[烏邑](オ)の字は原文では一字で、「烏」の右に「おおざと」を書く。以下フォントに存在しない字を同様に[]内の合成の形で示す。

5.4 文型「何 V Yu N」

何 (1988a:261) には何¹を用いた「何動於 X」(小論では「何 V Yu N」と表す) の文型として、5.1.(7) の例を含むいくつかの「有」以外の動詞の例を挙げている。すでに見たように、「何 V Yu N」の例である (7) は同じ動詞「患」を用いた「何 V 焉」の例 (6) と同様の構文である。その差は動作の受け手である N が名詞で表されているか代名詞であるかの差にすぎない。

しかし何氏は「何 V Yu N」の文型の由来を「何有 Yu N」と関係付ける。その結果 (7) を「對於彗星の出現有甚麼可担心的」(彗星の出現について何の心配することがあろうか) ととらえる。筆者の意見ではこれは「為甚麼要担心彗星的出现」(どうして彗星の出現を心配しようか) とすべきである。前者は「何 V Yu N」の文を存在しない「有」を補うことではじめて成立するが、後者にはその必要がない。また前者は動詞と N の関係について意味上の制約はないが、後者の N は V の動作の受け手でなければならない。以下の例を見ると、

(13a) 癸巳，潘〔元王〕之党与養由基蹲甲而射之，徹七札焉。以示王，曰：“君有二臣如此，何憂於戰？”(成 16・2・886) 癸巳の日のことだが、楚の潘〔元王〕の子潘党は、養由基とよろいを的にして射くらべをやり、七重ねを射抜いた。それを楚王に見せて、「かくの如き弓の名手二人がおりますゆえ、いくさについてはご心配なく」と言うと、…

何氏訳：對於戦争的勝敗有甚麼可憂慮的（戦争の勝敗に対して何の憂慮すべき事がある）

(14a) “…夫其敗也，如日月之食焉，何損於明？”(宣 12・2・748) (敗軍の将・荀林父をかばって土渥濁が晋の景公に) あの敗戦は、日食・月食のように〔一時的なもので〕、光明が失われたものではありません。

何氏訳：對於它的光明有甚麼損害（その光明に対してどんな損害があるか）

(15a) 子産成政，有事伯石，賂与之邑。子大叔曰：“国皆其国也，奚独賂

焉？”子産曰：“無欲実難。…何愛於邑？邑將焉往？”（襄 30・3・1180）（鄭の）子産は執政の座につくと、伯石（公叔段）に任務を与えて、邑（まち）を贈与した。子大叔（游吉）が、「国はみんなの国なのに、なぜ伯石にだけ贈与するのですか」と言うと、子産は、「欲を無くすのは難しい。…邑を与え惜しむする必要はない。邑がどこかへ行ってしまわないのだから」

何氏訳：對於土地城邑有甚麼可愛惜的（土地や町に対して何の惜しむことがあろうか）

以上 3 例に対する筆者の提唱する訳はそれぞれ、

(13b) 為甚麼要憂慮戰爭的勝敗（どうして戦争の勝敗を憂慮しようか）

(14b) 怎麼会損害它的光明（どうしてその光明を損なうはずがあろうか）

(15b) 為甚麼要愛惜土地城邑（どうして土地や町を惜しもうか）

となる。「憂」「損」「愛」のいずれも後に直接目的語を取ることができ、挙例における N の意味役割はいずれも動詞の動作の受け手となることができるものである。「何動於 X」に現れる他の動詞として何氏の挙げる「怨」「恃」「恤」「[?] 廖」「信」「及」についても同様である。最後に「於」ではなく「乎」が現れる「何動乎 X」（いずれも筆者のいう「何 V Yu N」に含まれる）の唯一の例を見ると、

(16) “…且諺曰：‘心苟無瑕，何恤乎無家？’天若祚天子，豈無晋乎⁸！”（閔 1・1・259）「…諺にも、『心にきずがないならば、家が無くとも心配するな』と申します。天があなたを見棄てられぬなら、なにも晋にいることはありません」

何氏訳：心里如果没有疵瑕，没有家又怕甚麼？（心に欠点がなければ家が無かろうとも何を恐れようか）

筆者訳：心里如果没有疵瑕，為甚麼要怕没有家？（心に欠点がなければどうして家の無いことを恐れようか）

⁸何氏のこの箇所は「豈無晋乎」となっているが、楊氏他すべて「其無晋乎」となっている。

のように、古くから伝えられたことわざの例として出てくる。これは「乎」が「於」よりも古い文献によく出て来るという定説を裏付けるものだが、その反語における使い方はこれまでの「於」の例と同様で、筆者が両者とも Yu の中に含める根拠ともなる。

6 まとめ

以上見てきたように、何 (1988a) において何¹に分類される例には何³と考えられる例がいくつも見られる。その原因は、反語文「何 V Yu N」「何 V 焉」が形式上は前置詞を介在させていても意味上は動作の受け手を直接目的語にとる他動詞構文であるという事、その中の前置詞 Yu が動作の実現可能性に対する話者の主観における否定的態度を示すのに一役買っているという事がまだ認識されていなかったためである。そのために何氏は「何有焉」のわずか 5 例における「有」を 3 通りに分類したり、「何 V Yu N」の文型の由来を「何有 Yu N」と関係付けて「有」を補って訳したりしなければならなかった。他動詞構文としての「V Yu N」「V 焉」の存在 (事実それは何 (1987) の中では筆者とは意見が異なるが検討されている) を中心に据えて考えれば、その必要はなくなる。むしろ典型的な他動詞を中心に発達した「何有 Yu N」が、更なる文法化の結果、他動詞性の低い動詞「有」に及んだと見るべきであろう。

何¹を用いた疑問・反語文は前置詞句を伴わない「何 V」の形をとり、何³を用いた単純な疑問文は「何 V N」「何 V 之」の形をとり、そしてここで見てきたように何³を用いた反語文は「何 V Yu N」「何 V 焉」の形をとる、というのが筆者の考える他動詞構文における何¹と何³との新たな判別法である。

【参考文献】

- Anderson, Stephen R. 1971. On the role of deep structure in semantic interpretation. *Foundations of language*, 7.
- Anderson, Stephen R. 1976. On mechanisms by which languages become ergative. in Li & Thompson ed. *Mechanisms of syntactic change*. University of Texas Press

- 郭錫良主編 1998 《古漢語語法論集》所收，語文出版社，北京
- 何樂士 1987 《〈左傳〉的介詞“于”和“於”》，何 (1989) 所收
- 何樂士 1988a 《〈左傳〉的“何”》，何 (1989) 所收
- 何樂士 1988b 《〈左傳〉的“焉”》，何 (1989) 所收
- 何樂士 1989 《左傳虛詞研究》，商務印書館，北京
- 鎌田正 1971-1981 『春秋左氏伝』一～四，新釈漢文体系，明治書院
- 小倉芳彦 1988-1989 『春秋左氏伝』(上中下) 岩波文庫
- 沈玉成 1981 《左傳譯文》，中華書局，北京
- Sugita, Yasushi. 1994. Imperfective use of the preposition "YU" in Archaic Chinese. *Current issues in Sino-Tibetan linguistics*, Osaka.
- 杉田泰史 1998 《介詞“于”的未完成用法》，郭 (1998) 所收
- 杉田泰史 2000 「『左伝』にみられる古典中国語の未然構文」『人文論集』第 38 号，早稲田大学法学会
- 楊伯俊 1981 《春秋左伝注》，中華書局，北京

Rhetorical questions with HE in *Zuo Zhuan*

Yasushi SUGITA

Archaic Chinese has an interrogative word HE. He Leshi(1988a) classified uses of the word HE in *Zuo Zhuan* into three: 1)interrogative pronoun HE1, which means ‘ what ’ or ‘ who ’ ; 2)interrogative adjective HE2, which means ‘ what kind of ’ ; 3)interrogative adverb HE3, which means ‘ why ’ . This paper reconsiders her analysis mainly on HE1 and HE3. The author had already proposed a hypothesis that a preposition Yu makes V-O sentences into V-Yu-O patterns, which codes speaker’s negative attitude about realizability of the action or event of V and had named it ‘ irrealis construction ’ . Based on this point of view, some of the HE1 examples used in rhetorical questions listed by He Leshi are not pronouns but adverbs since they have HE-V-Yu-O patterns, in which HE cannot be moved O.